

浄土

五月号



蓮

法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別技術記録誌) 第三五二号
昭和四十四年四月二十五日 印刷 昭和四十三年五月一日 発行

第三十四卷

第五号



・働くよろこび・

みずみずしい若葉のかおりにつつまれ、自然のすべてに生命の躍動を感じる季節である。しかし、現代人は、自然の息吹のなかにはぐくまれていた自分の生命のすがたに気づくことがすくない。

毎日の生活に馴れてしまい、ものごとをあたりまえと受けとり、たえず欲求不満にあえぎ、ほんとうの喜びでも、感激も味わうことがない。それは、人生の真実のありかたを憂視する事ができないからである。

「昨日もいたずらにくれぬ。今日もまたむなしくあけぬ。いまいくたびかぐらし、いくたびかあかさんとする」八登山状と、法然上人は、人の世のすがたを洞察しておられる。

いたずらに過している自分に気づき、人生のはかなさを、味わうことができるということは、生きていく自分の尊さ、ありがたさを感じる事ができる人である。

健康をあたりまえとおもい、働くことに興味も、情熱も失われていくのではなく、健康であることを、おかげさまとうけとり、喜んで働くこと、働けることを喜ぶころを、お念仏は育ててくれる。

あみだ仏といふより外は津の国の

なにはのこともあしかりぬべし

法
然
上
人
御
歌

— 目 次 —

表紙「魚」松濤達文画

悉有仏性・悉皆成仏

..... 安居香山… (2)

二祖三代の歩み (2)

..... 三枝樹隆善… (6)

インドネパールの旅 (1)

..... 戸松啓真… (9)

座談会(2)仏教・社会・人間

武田泰淳・宝田正道・佐藤密雄・竹中信常… (12)

四苦八苦(9)法爾の道理

..... 渋谷賢広 (16)

アメリカに於る開教師を終えて(3)

..... 伊藤正穂… (18)

古刹訪問 神奈川・大山「西岸寺」

..... 中村昌治… (22)

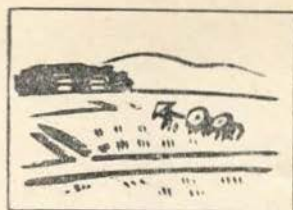
和訳三部経 念仏往生の願

..... 村瀬秀雄… (24)

お歌をいただく… (28)

児童劇 ピーターとおおかみ… (25)





性仏 有仏 悉有 悉

山 香 居 安

もう六七年前のことであろうか。私がある家に三回目の引越しをして間のない頃、茶色の野良犬の子が、わが家にまぎれこんできた。クンクンと鼻をならして小さな尾を振り、裏木戸のあたりをうろついて去ろうとしない。子供は、可愛いベットとばかり頭をなでていたが、

「住みついたら大変だから、追い出しなさい」

と、生き物を飼うことの余り好きでない私は、大声で怒鳴った。仕方なしに子供が裏の畠まで捨てて行くのだがすぐ帰ってくる。二度三度繰り返しても帰ってくるので、私はイライラしていた。気をきかせた妻が、箒などを持ち出して、追い

出した。尻を叩かれた小犬はキャンキャンと鳴いてヨロヨロと逃げ出して行った。

ところが、しばらくしたら、何時の間に入ってきたのか、縁の下でクンクンと鳴く犬の声がしてきた。

「おい。犬が縁の下に入ったらしいよ」

家内中で顔を見合わせた。何処から入ったか、それらしい穴もないのにと、家の廻りを見ると、便所の脇に僅かな穴が一つだけあった。そこから入ったに違いない。とても出てこれられそうにない。困ったことになった。ほっておけば死ぬかも知れない。私達は畳をあげ、床板をはがして、縁の下をのぞいてみた。確かに隅の方でクンクン鳴く声はするが、とて

も手のとどくところでない。縁の高さも、大人は入れない。止むなく長男に小犬の連れ出しを命じた。

「大変だなあー」

小学校一年生になったばかりの長男は、それでもいわれるままに縁の下にもぐりこみ、右往左往していたが、逃げる小犬を捉え切れず、泥だらけになってはい出してきた。思案に暮れた末、落とし穴を作ることにした。スコップで五十センチ程の深さの穴を掘り、その上に新聞紙をおき、カマボコ一切をその上において、取り敢えず畳を敷いた。

夕食も終わった頃、

「父さん、犬が鳴かなくなったね」

という長男の声に、思い出したように畳をあげてみた所、案の定、犬はカマボコをくわえたまま、仰向けに穴に葉ちていた。余りの恰好の面白さに、一同ドット笑った。

こんな機縁で、野良犬もわが家の一員となった。これも仏縁というものであらう。



さて飼ってみれば可愛いもので、私も朝な夕なに小犬を見に行った。どうしたものかおしっこをするときの恰好が、腰だけのいたらくであった。後足をふんばるのであるが、その恰好がただこでなかった。

「私が、余りひどく等で尻を叩いたからでしょうか」と妻は、申し訳けなさそうに小犬を見ていた。しかし、その腰つきも、何時の間にかおって、妻もホツとした様子であった。

雑種の柴犬であったが、なかなか賢い犬で、教えることをよく覚えた。丁度、ブラジルで革命のあった頃であつたので、その名をジルとつけてやつた。家の者の足音は、余程遠くからでも聞きつけて、「ワン」と一声吠えたが、見知らぬ人には、やたらに吠えた。野中の一軒家であつただけに、有難い番人となってくれた。

何時の時の秋であつたか、台風で荒れた。暴風雨の中では可愛そうだと思つてジルの小屋に行ったら、その姿が見えない。鎖ごと逃げ出したらしい。余りの風雨の強さに驚いてあばれている中に、杭から鎖が解けたらしい。嵐の中を

「ジル、ジル」

と呼んだが、一向に反応もない。諦めて帰った私は、それでもその行方が心配であつた。嵐はますます激しくなり、日も暮れて、電気もつかない。夜九時頃であつたか、余りの激しい風に、玄關の戸が危いので、表に出て、釘打ちをしていた。かがみこんで仕事をしていた私の背中におどりかかるものがあつて、私はビックリした。

「だれだ」

と絶叫した。しかしそれは、人ではなくて、ジルであった。ちぎれる程に尾を振って、私の胸の中に顔をうずめてきた。嵐の中で、私はしっかりと抱きしめてやった。

犬は泣くというが、懐中電燈で照した犬の目からは、涙が流れていた。



一年程前から、ジルは下痢を始め、時々血便を出した。動物の事とて、事情も分らぬまま、その内に癒るだろう位に思っていたが、なかなか、癒らなかった。そうこうしているうちに、私もささやかな家を新築して引き越すことになり、暮から正月にかけてごった返した。ジルの病氣も忘れたわけではないが、とてもかまっていられなかった。

ようやく春になって、相変らず下痢をするジルが心配になって、知り合いの獣医に聞いてみると、

「虫だろう」

と軽い返事であった。医者にかけるのは大変と思い、デパートの犬売り場で虫薬を買ってきて飲ませてみた。仲々飲まないのので苦労したが、それでもいろいろと工夫をして飲ませてやった。しかし、一向に癒らず、ますますひどくなった。

ジルは痺せる一方であった。真夏も過ぎ秋ともなった頃、ジ

ルの食欲は一段と少なくなってきた。

犬小屋をのぞいても、今までは尾を振って出てくるのが、その頃は小屋で寝たまま、うさんくさそうに空ろな目を私に向けて、僅かに一二度尾を振った。

「このままでは死んでしまうぞ」

そんな心配が私の脳裏をかすめた。再び私は知り合いの獣医を訪ねた。

「癒るのに四五万はかかるね。しかし、もう手遅れかも知れない」

獣医はそんなことを言った。新築で出費のかさんだ私は、とてもそんな金をジルに出すだけの余裕はなかった。私は躊躇した。そして、又犬の薬を買って飲ませてみた。した。

冬の朝、私はジルの食事を犬小屋に持って行った。しかし、昨夕やった食事がそのままであった。私はビックリした。鼻ツラは、それでもいくらか温っていたのでホッとした。

「このままで死んでは可愛そうだし、僕達も後悔するぞ。入院させよう」

妻と相談をした私は、大急ぎで近所の獣医を呼びつけた。「大分手遅れになりましたね。しかし、何とかやってみましょう」

そういって、獣医はジルをハイヤーに乗せた。ジルは抵抗

一つせず、その車に乗り込んだ。しかし、それがジルと私の最後であった。

「注射をし、灌腸もしてみましたが駄目でした。申し訳ありません。」

獣医は電話で、ジルの死を伝えてきた。あやまられた私達の方が、恐縮した。又、もっと早くしてやればと後悔もした。幼稚園の長女も

「ジルが死んだ」

とワンワン泣いた。私達にしてみれば、病院で死んでくれたことが、せめてもの慰みであった。



「可愛そうだから、手厚く葬ってやろう」

獣医に相談した所、深大寺に犬猫の墓があり、火葬にした上で安置してくれるという。そういうえば、昨春その辺を、子供達と散歩したことを思い出して、

「是非とも宜しく」

ということでお願ひした。あくる日は丁度日曜日であったので、早速行ってみた。段ボールに納められたジルは、祭壇の奥に飾られていた。

「最後の別れをしますか」

と掛りのものが言ってくれたが、私は可愛そうだからと、

断った。二人の子供は、目に涙をためてジット箱を見ていた。持ってきたミカンを供え、線香をあげた。心ばかりの十念をあげて、私はその場を立ち去った。

それからしばらくして、再び私達は、ジルの墓参りをした。已に骨となったジルは、納骨堂に飾られていた。

「愛犬ジルの墓」

と位牌ができていた。

「今度は、写真を持ってきてやろうね、長女は近所隣りの祭壇をのぞきこみながら、そんなことをいった。これでジルも成仏してくれたに違いない。」

まぎれこんできたこの小動物も、同じく尊い生命をさずけられて、この世に生れてきたのだ。そして、短い生命を、こうして終って行った。果してその間、ジルにとって楽しいものであったか否かは、知る由もないが、この犬なりに、その一生を終ったのである。僅かに一回、近所の野良犬と交尾したことを知っている私は、この犬にも青春があったと考えている。そして、その生命が、必ずや次の小犬の生命として、受け継がれたことと信じている。宇宙の生命は、こうして、絶えることなく受けつがれ、榮えているのであろう。私は、ジルの飼って、悉有仏性ということを教えられるとともに、その死に直面して、悉有成仏ということも確信させられた。

二祖三代の歩み



三枝樹隆善

三 高祖の人間像

——白道を歩む山僧——

善導大師は、自分で書かれた『観無量寿經』の註釈書のなかで次のような譬喩を説いておられます。

一人の旅人が、はてしなく続く路を東から西へ向って歩いていました。そうして突然、前方に大河が横たわっているのを見ました。それは何という恐ろしい河であろうか。左には波浪が激動していた。ところが、その水火の真直中にかすかに一筋の白道が見られた。白道は幅がわずかに四五寸で、東の岸から西の岸にいたるまでの長さは百歩位であったが、火焰と水波が常に入り交ってその白道を覆うていた。渡るにはあまりにも危険である。旅人は躊躇してあたりを見まわしたが今さら引き帰すこともできない。そのうちにその旅人が一人ぼっちであるのを見て、群賊悪獸が殺しにやっけて来た。そこで絶対絶命の苦境に陥ち入った旅人は、白道を渡ることを決

心した。その時、東の岸からは「行きなさい」という声が聞え、西の岸からは「来なさい」という声が聞えてきた。前者は釈迦の声であり、後者は弥陀の声であった。そうして「私があなたを護ってあげます」という弥陀の声を聞いて、その旅人は白道の第一歩をふみ出した。その時、また東の岸から「その道は危険で死の道です。早く帰って来なさい」という声が聞えてきた。それはすなわち群賊の誘惑の声であった。しかし、旅人はその声に耳を傾けないで、白道を脇目も振らずにまっしぐらに進み、ついに西の岸に達して難をのがれ、待ち望んでいた善き友と会うことができた。そうしてその喜びはこの上もなかったというのであります。

これは、善導大師の二河白道の譬喩としてあまりにも有名な話であります。この譬喩には、浄土宗の信仰のかなめともいうべき極めて重要な内容が含まれています。この譬喩のなかに現われている旅人は、善導大師その人であり、またわれ

われ一人一人の姿を描いたものであります。ここでは、衆生のむさぼりの心（貪）が水の河にたとえられ、いかりの心、（瞋）が火の河にたとえられています。衆生はむさぼりの心やいかりの心によってみずから苦しみ悩んでいます。そのようなかれらにもかすかな信仰心の芽ばえが見られます。この信仰心の芽ばえが白道にたとえられているのです。善導大師はこれを、「貪瞋（むさぼりといかり）強きによるがゆえに、すなわち水火のごとし。善心微なるゆえに、喩うるに白道のごとし」と説明されています。これは取りも直さず善導大師の深刻な反省の告白であります。

ところで、善導大師の多くの伝記には、その日常生活の厳しさがいろいろ記されています。たとえば「目をあげて女人を見ず」とか、「洗浴以外には三衣（僧のきる三種の法衣）を脱ぐことなく、三十余年の間、一定の寝所なく、少しも睡眠せず。ただひたすらに浄業（念仏）を修す」といわれているように、善導大師は極めて厳格に自分を制して仏道の修行に精進されたことがうかがわれます。また善導大師と同じ時代の先輩で、同じく終南山で修学し、同じく長安の都で活躍された仏教学者、道宣律師（五九六―六六七）が著わされた『高僧伝』に、「ちかごろ山僧の善導（六一三―六八一）なる者あり。寰寓（天下）を周遊して道津を求訪し、行きて西

河（山西省太原府）に至り、道綽の部（師）に遇う。ただ念仏し弥陀の浄業を行ずるのみ。すでに京師（長安）に入りて広くこの化を行う。弥陀經數万卷を写す。士女の奉ずる者その數無量なり」と記されています。

高僧と崇められる人は沢山ありますが、山僧としての善導大師が、しかも生存中に高僧伝の中に記されるということは実に意味深いことであります。山僧と呼ばれた善導大師は三十歳に満たない若さで、あの広大な中国大陸の各地を訪れ、名匠高德を尋ね、求法の旅を続けられました。そうして漸く念仏の教えを説く道綽禪師にめぐり会って、およそ十年の間その教えをうけてただひたすらに弥陀の浄業を修せられたのであります。こうして念仏の白道を一筋に歩まれた善導大師は、宗教者としてあまりにも偉大であったために、人びとから阿弥陀仏の化身と仰がれ、長安の都では、苦しみ悩む民衆の友となり師となつて、いつの時代にもあてはまるすぐれた念仏の教えを説かれたのであります。

四 宗祖の遺風

――黒衣の僧――

富士山の姿はまことに美しい。白雲の上に聳えるあの美しい秀峯を支えているのは、実に広大な裾野であります。それと同じように、富士の秀峯にたとえられる宗教的偉人という

ものは、一般民衆の信仰心によって支えられているということができます。宗祖、すなわち法然上人の宗教者としての偉大さは、宗祖がみずから黒衣をまとい一般民衆の友となりみずから愚鈍であることを自覚して、もっぱら念仏を申された姿の中に認められます。

宗祖が勢至菩薩の化身であるということは早くから人びとに信じられていました。親鸞聖人は、その師、法然上人のことを『高僧和讃』のなかで「源空（宗祖の実名）勢至と示現し、あるいは弥陀と顯現す」とか、「智恵光のちからより、本師源空あらわれて、浄土の真宗をひらきつつ、選択本願のべたもう」などと、ほめたたえておられます。勢至とは智恵をあらわしたものです。宗祖が勝れた智恵の持主であったことは、その別伝に「智恵第一の法然房」と記されていることによって知られます。また念仏の教えにさからった日蓮上人でさえも「天下無雙の智者、山門（叡山）第一の学匠なり」（念仏無間地獄鈔）といわれています。事実、宗祖が秀才であったことは、今日、すべての人びとの認めるところであります。

宗祖は九歳のとき、恨みをうけて亡くなられた父の遺言をまもって出家され、早速、叔父にあたる郷土の菩提寺の観覚という方について学問を始められました。そうして十五歳の

とき、宗祖は当時、多くの仏教学者が全国各地から集って、仏教を研究していた比叡山に登って、持宝房源光という学問僧について勉強されたが、師匠は、二ヶ月もたたないうちに宗祖の才能のすぐれていることに驚くとともに、もはや自分の手に負えなくなったので、当時の偉大な仏教学者で歴史学者としても有名な皇円阿闍梨に宗祖の教育をたのまれた。宗祖はここで始めて仏教の戒法をうけて僧になられたのであった。それから宗祖は三年間そこでみっちりとした天台の学問を研究されたが、しかしこのように煩瑣な天台の学問を研究していても、現実生活に苦しみ悩んでいる一般民衆を救うことはできないし、また自分の苦しみ悩みをも救うことはできないということを煩悶して、十八歳の若さで比叡山の中で最も静かな黒谷へ行って、そこで慈眼房叡空上人に師事して隠遁生活に入られた。その間に多くの学匠に生死解脱の道を尋ねられたが、誰一人としてそれに満足な解答を与えるものはいなかったのであります。こうして徹底的に苦しみ悩まれた宗祖は、ある日、経蔵に入って善導大師の『観経疏』を手に入れました。その中に、一切衆生の救われる道は、ただ念仏の勝れた教えによるほかはないという意味の教えを発見され、ここにおいて宗祖は確固たる宗教的確信を得られたのであります。（つづく）

インド・ネパールの旅 (1)

—インド日本寺

起工法要団随行記

戸松啓真

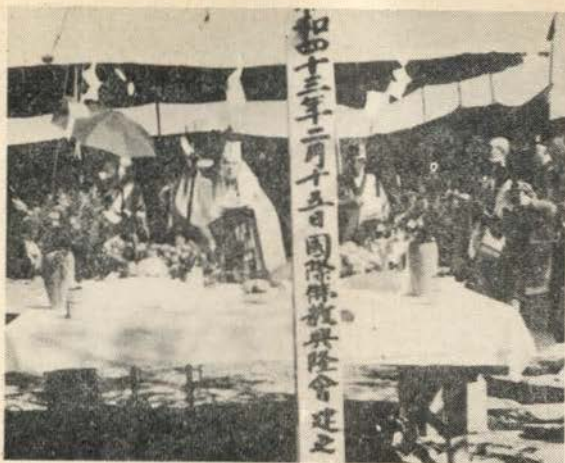


<ブッダガヤの大塔>

このたび、わたくしは有難いもろもろの機縁にめぐまれて二月十日から約二週間、インド・ネパールを楽しく旅行させていただいたのであるが、旅行中にとった四百枚近い写真ができたが、まだその整理もつかない矢先に宮林先生からインド旅行について三回位なにか書くようにとの話があったので、今回は感想と日本寺起工式についてのべ、次回から気楽にインドとネパールの各地についてお話をさせていただく。

聖地参拜

仏教徒にとってはその教えのふるさとであり、かつて教主釈尊が生れ修行し悟りを開かれたインドの聖地をたずねることは、一つの夢であり悲願であったと思う。昔この夢を實現しようとして途中でむなしく死んだひとびともいたし、中国の法顯や西域記で有名な玄奘や義浄のように大変な辛苦の末、目的を達したかたがたもいた。日本では法然上人と同時代の京都高雄の明恵上人が、三十才の時にインドに渡る志をたて、「印土はるかにへだつといえども、行けば必ず到らん。その路險阻なりとも、死をもつて期とせば更に怖れあるべからずと同行の人数や用意万端ととのえたが、周囲からおしとどめられたということが伝記にある。聞くところによると、日本人で初めて釈尊成道の聖地ブッダガヤをたずねたのは明治初期の北島道竜氏であるというから、国情によるとは



日本寺起工式

いえ昔はいかに困難な旅であったがわかるのである。北畠氏の参拝記念に自分でほられた碑が、大塔の側にあるのを知ったのは、帰国後でまことに残念であった。このように近年までむずかしかった聖地参拝が、ただいまではジェット機でわずか八時間半で、カルカッタのダムダム空港へおりたつことができるのである。しかもこちらを出発したのは冬の寒い日

であったが、八時間半後にインドへ着いた時は、ちょうどどちらの初夏のような爽やかな気候であった。わたくしたちの一行は僧侶あわせて十六名であったが、そのうち老父と成田元成師と服部弁雅師

の三人は八十をこえる高齢であるにもかかわらず、靈鷲山に登り王舎城の旧蹟に立ち鹿野園に遊ぶなど聖地巡拝のできたことを思うと、他のかたがたの援助によるとはいえ入竺について今昔の感にたえないのである。

インド日本寺の建立

寡聞にしてわたくしは、現在ブッダガヤにタイ、中国、ビルマ、チベットなどの仏教国の寺院があることを知らなかった、それ故にどういう目的で日本寺をたてるのか疑問に思っていたのであるが、それは現地へ行つて次第にわかってきた。やはり百聞は一見にしかずである。書物によると仏教はインドにおこりながら、回教徒の侵入により十一、二世紀頃には衰滅してしまい、遺蹟なども破壊されてしまったといわれ、一九六一年の国勢調査ではインド人の八割三分位がヒンドゥー教徒で、仏教徒は〇、七五割位といわれている。たしかに仏教寺院はほとんどなく、昔あったものも今ではヒンドゥー寺院にされたものが多い。各地の博物館にある石仏も首を落されたりしたものが多いのはそれを物語っている。しかし釈尊の遺蹟はどこも政府によって立派に発掘され保存されているし、インド人は釈尊をインドのほこりとして語る。今回インド人から聞くと仏教徒は全人口の二割位にふえていゝという。とくに賤民階級の人びとが集団で改宗したそうである。



＜ブッタガヤのタイ寺＞

たたくしの
ところに
やってき
て、英語
ができる
かと聞か
れた。少
しという
と、自分

る。わたくしはブッタガヤの釈尊成道の地にたてられた五十
米におよぶ大塔に昼となく夜となく参拝し、お経をよみ、熱心
に五体投地の礼拝をしている人びとをみたのである。その多
くはチベットの僧と仏教徒であったが、もちろんインド人も
各国の仏教徒もいた。そこに死んだと思っていた仏教が生き
ていたのである。とくにわたくしが意外に思ったのは西洋人
の仏教徒とくに若い仏教徒が数人組で毛布を持って、レスト
ハウスや各国寺院に泊まりながら仏教研修をしていたことで
ある。それは二月十四日の夕に、ブッタガヤのレストハウス
に着いた時のことである。わたくしが入口で荷物をあけてい
た時に、一人の若い外国人が（それはアメリカ人のようであ

達は仏教徒であるが今夜泊めてもらえるかという。そこでわ
たくしたちの世話をしているインドの旅行社のセチ氏をよん
でくると、このレストハウスは日本人でいっぱいだから他の
ところへといっていた。しばらく話していたので、あとで聞
くと彼等は瞑想による心の平安を仏教に求めているとのこと
であった。このようなことから、日本寺が建立されると国
際仏教センターとしての意義も大いにあるのではないだろう
か。そしてさらにラオス、シッキムの寺も建設が予定されて
いるというから、何年かあとには、ブッタガヤが再び世界仏
教の聖地になる日がくるかも知れない。

二月十五日午前十時から行なわれた起工法要は、インドビ
ハール州当局の代表、各国寺院代表、インド大菩提会（仏教
会である）の僧、および欧米の仏教徒など多数が出席した意
義あるものとなった。これは出発前には予想しない有難い現
象であった。わたくし達は一世一代の読経をし、鍬入れ式をい
れて一時間余りであったが、そのあとタイ、ビルマ、セイロ
ン、インドの僧による合同読経も感深いものがあつた。法要
終了後、インドの流儀によって国際仏教興隆協会の施食（パ
ラパラの米とカレー）がなされたが、五百人の予定のところで
千五百人位集つたのには驚いた。功德大なりといえ、聞いろ
いた通り食糧事情は悪いらしい。（つづく）

座談会〔2〕

仏教 社会 人間

武田 泰 淳
(作家)

宝田 正道
(中央公論総務部長)

佐藤 密 雄
(大正大学教授)

竹 中 信 常
(大正大学教授)

現実と未来のすがたをもとめて

宗団と僧侶とのふれ合い



竹中 次に両先生共に僧籍をお持ちと思いますがこのことについては。

武田 持っておりますが、私達宗外で働くことを破門するなり等、厳格さが足りないとい

思います。

竹中 浄土宗という一構成体として破門できないか、破門させないのか、どちらでしょうか。

武田 亡なれた藤田寛雅先生は「私を破門しない人はけしからん」といっておりましたが、私もこの意見に賛成です。私は「異形の者」というものを書きましたが、キリスト教ならば決して許されるべきものではなかったはず。つまり無教会主義か、教会主義か、あるいはどういう道をとって天国を意識するか、もし異端であるならば、すぐにそれをしめ出す要心があれば宗門は絶体保持できないと思います。これは日本の民族主義に由来することですが、もしもこの様な暖昧さが許されるのならば、宗門も大放棄すべきであり、それを保持するのならば厳格さということは絶対に必要なことではないでしょうか。

佐藤 少しいいすぎかもしれませんが、厳格さということは仏教サンガの成立以来ないことなのです。例えば提婆の事件です。これは破門であるか追放であるか確証のないこと

ろですが、以後も提婆の集団は仏教徒としての修行を行っていたのです。つまり仏教では四人以上の僧侶が自分達の信する教えはこれであるといえ、それを否定する機関はないのです。この団の組織の仕方は共通であつても中央本部というものがありません。中国以降伝燈という形で管長という職を設けたのですが、本来は各々の良心に従つて組織されていたのですから、破門という形は、やがて信仰のこまごました先々まで吟味をかさねた、浄土真宗に至つて確立して來たのです。

武田 ただ理論的な意味では採擇できなくとも、政治的な争いの中では日本でも一向一揆等宗教戦争は相当なものがあつた。この点から仏教が曖昧であり、寛容であるということはいえないと思ひますが。

佐藤 権力に対しては非常に強いものを持つています。恐らく宋元明清各時代の蓮社組織も一種の革命集団であつたと思われまふ。

竹中 しかし、異端に近い勢力は各時代とも出つたものではなかつたでしょうか。

武田 確かにあつたでしょうが、完全なエネルギーとなつてあらわれたものがなかつた

のです。もし完全にあらわれるのなら、それに対する対策もでたでしょうが。

佐藤 しかし仏教にはそれだけの組織的な中央機関の様なものを組織する体質がないのではないのでしょうか。

信仰と教理

竹中 そうした制度的な問題と、もう一つ仏教学と仏教信仰との触れ合いということがいわれると思ひますが。

武田 それは永久の問題となるものです。

つまり現在の日本仏教界のみの問題ではないのです。ある一つの信念を学的に追究していくことと、ある一つの宗門の勢力を組織的に伸張させていくことは、全く異なった能力なことです。これを両立させることは宗教的な天才でなければできないことです。例えば新仏教主義を鼓吹した、渡辺海旭先生は、一方で、西欧の仏教学者を屈服せしめるだけの仏教理論を打ち出さねばならなかつたのであり他方では、宗門人として宗内の護持にあた

なければならなかつたのです。一方を取れば更に大成を見たでありましようが、両立はなし得なかつたと見る事ができるましよう。

しかし先生の立場からすれば共に必然の立場であつたと理解しなければならぬと思ひます。したがつて、宗教の問題は何によつて引きつけられるかという点で、大変むずかしいものだと思ひます。人間は論理的面のみで考えるものではないということです。感情的でもかなわないのです。私達が男女間の問題で理性の外肉体に固執すると同様に、浄土宗が好き、禪宗が好きといううらには多少肉体的な問題が含まれていると思ひます。何も個人的な肉体というのではなく浄土宗体という肉体ということですから。これは神仏を裏切ることにはなりません。お釈迦さまにしても私達の理想である円満具足の肉体を持ち合わせていらつしやるのです。鎌倉の大仏様にしてもそうです。これらのものに対して、私達の心の中には、私達は不完全であり、やがては消えゆくものであるから、最後まで残つてほしいと願う気持があるのです。例えば、仏像の形を考へることは大変むずかしいし、決定する

ことは困難ですが、決定する立場に追いこまれることを欲しているのです。つまり、浄土宗でいうならば信仰上どのようなアミダ様がよいのか決定してくればよいのです。外界ではなく私達自身の内面の問題なのです。それを確定しなければ議論しつくしえないと思います。

竹中 要するにそこまで追いこまなければならぬのですね。

信仰の中の自分の立場

武田 そうです。私達自身の力で私達を追いこめばよいのです。宗門の最高幹部が厳格でなければならぬという以上に、私達が厳格でなければならぬのです。でなければキリスト教にも負けてしまいます。仏教は論理的に、論理的にやって来ているのです。この意味で抵抗し、成功したのが鈴木大拙先生です。ケスト・コテキ等の人々と国際的に対決しています。国内には強敵はいなかったのです。ですからどうして国内において先生が

政治生命を確立することができるとましようか。国際的に見てわずかに残り得たのです。

私達はやり合わなければつきりと自分の立場を確立することはできません。寺門生活にしてもそれに耐えているからこそ成立っているのであり、逃げ出してしまえば何の意味もなくなることになるのです。

佐藤 精神的に耐えているからこそ、寺門の生活ができるという理解できますね。

武田 とどまっていることの意味を自覚しひきつめねばならぬのです。私達で宗外に出ていくというはずかしさをつきり知っていただけでは、とどまっているということの意味が分ると思います。

竹中 こうはつきりいつて下さる人は仲々いなかったのですが、同時に今までの僧侶にはこの自覚が欠けていたことになりましたね。今武田先生がいわれましたように、僧侶としての自分自身の立場をはつきりととらえることは必要なのですが、現実には、なかなかうまくいかないようですね。この点大いに反省すべきですね。

僧侶としての自覚の再発見

宝田 宗門内の僧侶が、他の職業を兼ねている中に、自分は一寺の住職であるという自覚をもっていれば宗門は栄えらると思います。しかしただ金もうけのために他の職業につくという考えにすり換えられる時に、宗門の危機が来ると思います。

武田 私達ははずかしいと自覚しながら、あえて攻撃せねば宗門の発展は見出せないのです。耐え忍んで守っている人々には、私達の気持は分らなくとも、耐え忍んでもらわねばならないということです。時限の迫る人々の語してはいけません。あるキリスト教学者との対談の席で、彼は宗教には「縄張り」はないといっておりましたが当然のことです。宗教者は根源的考えをもっているのです。宗教を張らなくとも良いのです。張るべき縄をも持ち合せておりません。私は彼に、「旧約の世界では罰の世界であったものが、イエスによって愛の世界に転化されたことが

理解できない」と質問したところ、これがキリスト教で現在問題になっているところであるといっておりました。なやんでいるのは私達のみでなく、キリスト教ではもっと深刻な問題となっているのです。ユニバーサルな問題なのです。

宗教の世界性を強調しよう

武田 この意味から世界宗教者会議は大賛成なのですが、その際制服をぬぐべきだと思います。もし法服を着ていればそのイメージによって阻害されてしまうからです。したがって背広を着、有髪でも良いのですが、精神の問題としてつきめねば救われないと解釈すべきです。形骸という問題が、この意味で使われるのならばよいのです。しかし、現に世界各地では悲劇がくりかえされておりますが、それを防ぐには宗教の外にないという信念があればすべて解決を見ることができるといえます。お釈迦様の教えはこの信念にもとずいているのですから、仏教徒である私達はより積極

的に出てその解決にあたるべきであり、その準備ができていのに実際にはなされていなのです。誠に悲しむべきことと思います。

宝田 そのことで思い出しました。中央公論の歴史になりますが、八十有年前、明治十九年に西本願寺の普通教校という子弟の教育所で反省会という禁酒同盟ができたのです。その子弟達は当時器械体操の先生であった高橋順次郎先生をかつぎ出していろいろな要求を出したのですが、その機関誌として反省会雑誌を出したのが中央公論の前身です。その後、文芸欄等を設置し、徐々に現在の体裁をととのえて来たのですが、初期のこれらの若い人達の主張は古いものを打破し、新しい世界観に立脚する運動だったのですが、その理念は仏教精神が、もととなっていたのです。これを考える時、この「浄土」なども若い人々が新しい要求をつきつけ、大きな力を示すべき時に来ていると思います。その場合宗門内のみでなく、外部に出ている宗門関係者をも含めたいわば同心円の形で何らかの改革を具体的な形で押し進めていくことは大きな勢力となり得ると思います。

竹中 その意味では、これら若い人々の育成を意図したという点では私達は大いに反省せねばならないことになりますね。

武田 このことは大変むずかしい問題です。いかなる宗教でもこの解決の方法を求めているのですが仲々見出せないのです。しかし、いずれにしても共通しているのは平等論であると思います。少し難しくなりますが、「もし私達が救われるものであるならば、全部が救われねばならない」「もし私達が救わさるものであるならば、全部が救われざるものであらねばならない」ということ。また別に「私達の力によって救われる人にならねばならない、それを目標にして努力しなければならぬ」という考え方があります。いずれにしても、仏教とは何んであるか、個々に答えを出せばよいのではないのでしょうか。

竹中 大変むずかしい、しかも多くの重要な問題を含んだ座談会となってしまいました。明治以降の新しい仏教のあり方について再考すべき問題を多々見出せたと思います。私達の今後のあり方の参考としていただきましたと思います。(了)



四苦八苦——その九

法爾の道理（五盛陰）

渋谷賢応

「生」にはじまりました四苦八苦も、この「五盛陰」を帰結といたしております。五盛陰をその言葉通り解釈いたしますと「五陰の盛んなるが故の苦しみ」と言いことになりまして、五陰と申しますのは、色、想、行、識の五つを言うものであり、般若心経などに出てきます色受想行識と同じことでありまして、人が外界のことを認識してまいります。過ぎたるほどの苦しみです。

色と申しますのは色法と申しまして、地水火風空の五大を指しまして、これらのものより成る物体、それを知ることのできる自分の肉体とでも申しましょうか。それ精神において受けとめる主体を五陰の最後

の識と申します。これは心法とも言われておりまして、この識が初めの色を五官を通して認知することを寛（受）と申し、これを受け入れて自分の思索の体系の中にもち込むことが想であり、それによって行動を起すのが行であります。従いましてこの寛（受）想行の三つを心所と申しておるのです。

さてそれが「盛んなるが故に」苦しまなければならないとはどう言うことでしょうか。五陰はもと仮の和合の姿であり、うつり変わるべきものであり、色によって形づくられていくものも、識によってわれわれが認知するそのわれわれも、すべて定った相

をなしていないのにそれに幻惑せられて染着してしまう自意識過剰が「盛んなるが故に」苦の、因となるとさとされているのです。妻子に、奴婢に、給使に、眷属に、田地に、屋宅に、店舗に、財物に、本東我がものでない、すべて因縁によって生じたもののなにより我がものなりと思い上ってしまふ。そんなところではない、この私でさえ自意識によって生れたものでもなく、自意識によって死んでゆけるものでもなく、自分で自分が何一つ思うようにならないのに自分を過信し自分におぼれ切ってしまった。この思い上りの自意識過剰が盛んなるが故に苦の根元となると説かれているの

です。愛念すべからざるものを愛念するが故に、たよるべからざる五陰をたよるが故に顛倒を見て苦に沈むと説かれているのです。

それならば最もたよりになるものは何であるか、これを心を落ち着けてお釈迦さまにおたづねいたしましょう。

「若し縁起を見ればすなわち法を見、若し法を見ればすなわち縁起を見る。その故は、五陰は、因縁により生じたものなのです。色盛陰、覺想行識盛陰などみなほんとうの因縁と見ることができないが故に苦しむのです。過去未來現在の五盛陰を厭い、厭い已れば欲なく、無欲なれば解脱することができのですよ」(中阿含三十、象跡喻經第十)

すなわちすべての諸相を形づくっている縁起の法、その法こそたよりになる唯一のものとお申さねばなりません。一体それは何によって形づくられるのか、縁起法を支配するものはなにか、若しそれがあるとすれば、これこそほんとうに頼りになるべ

き唯一のものと申さねばなりません。

「法爾の道理ということあり。ほのほは空にのほり水はくんだりさまになる。葉子の中にすぎ物あり、あまき物あり。これみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の願本は名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとねがい給いたれば、ただ一向に念仏に申せば來迎は法爾の道理にてうたがひなし」

申すまでもなく、法然上人のおことばです。縁起法とは、上人においては阿弥陀仏の本願を成就せられたことを指すのでして私たちは阿弥陀仏にすべてをおまかせし、それによってただお念仏を申しさえすれば余事、他事は念頭にない方がいい、念頭にすべきでないとお示めしになりました。法爾の道理とは縁起の法であり、大自然のあらがままの姿でありそれぞれのあるがままの個性であるわけでして、それをそのまま素直に受け止めることができればそれでよいのであって、苦の因とはなつてこないはずです。

縁起法をつかさどる阿弥陀仏の本願こそ

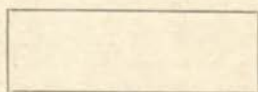
唯一の依り所としてのたのむべき帰趨なのです。孫悟空がさんざんあばれ廻つて世界の端から端、宇宙の果てから果てへと飛び歩いたと自任していても、気がついて見たら如来の掌の上だけの出来事であつたように私たちの限られた知識の範囲内のおもわくなどというものは、如来さまの目から眺めれば招呼の間の出来事なのでしょう。

ただ私たちが日頃経験する五陰のこのみではなく、法然上人は仏の來迎をもその大いなるおほしめしの中の第一に挙げておられるのです。五盛陰になやまされる私たち衆生を大安樂の弥陀の浄土におみちびき願うことが第一の法爾の道理、如来蔵の縁起とせられた上人のおさとり、浄土教の卓越性を今更の如く有難く思わずにはおられません。

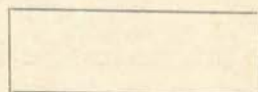
私たち凡夫の身にして、無我に住し、解脱を願うことは言うべくして行ない難いことですが、弥陀の光にこの五盛陰の身心をさらけ出し、法悦にしたることは法爾の道理として易行の道と申うのでございます。

アメリカに於ける 開教師を終えて

— 3 —



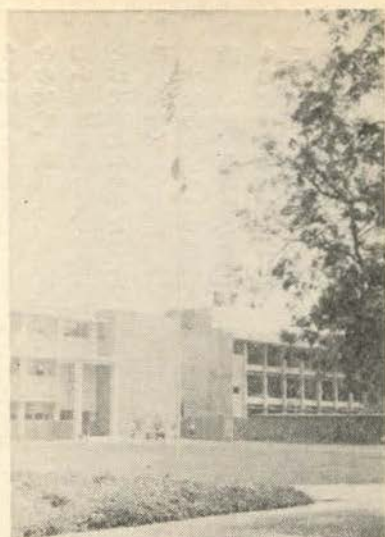
アメリカ生活点描



前ロスアンゼルス

浄土別院布教師

伊藤正穂



＜羅府市立大学＞

愚者は他人の欠点を見て喜び、長所をみてねたむ。賢者は他人の欠点を見て学び、長所を見て習う。私が帰国して話をするうちに、必ず「向うでは」ということばが自然に出て来る。最初のうちはよいが、何回もそれが出てくると聞く方でもいやになると思う。しかし、話を合理的に進めようとすると、つい出てきてしまう。私は、いつも、人間だれしも欠点があるが、同時に長所もあると思っている。人の欠点を見て自分を反省し、長所を見て大いに学ぶことは大切ではないだろうか。アメリカの生活にもよくない所もあり、我々が学ぶべき所もあると思う。参考になればと、思い出すままにくつかをあげて見よう。

最近、週刊新潮に阪大総長岡田実氏の新しい大学の制度についての言があり、入学試験よりも入学後の教育をきびしくしてはという意見が出されていた。我々がよく耳にしたことだが、米国では、原則として、入学することは比較的容易であるが、卒業するのは、むづかしい。大学生活の過程について、いく人かの学生は途中でやめてしまう。留学生の名の下にたくさん男女学生が外国から米国に来るが、何人かは卒業もできないで終ってしまう。アメリカ人学生と対等にやっけて行くことは、言語に絶する努力が必要である。私の留学経験からすると一学期一冊ですまされたコースはなかった、必

ずといつてよい程数冊の本が要求された。そして、Reading assignment Book report その他の宿題が課せられ、一学期間に二回以上の定期考査が行なわれる。しかしこれから得られた成績によって卒業、就職に影響をして行く。表面はのんびりしているように見えるアメリカの学生も、実際には、実に厳しい競争の中にある。日本では、米国の学生は遊んでばかりいるように見られやすいが、決してそうではない。むしろ日本の旧制の教育制度を近代化した厳しさがあるといえよう。

しかし、金曜日の夜から始まる週末ともなれば、若い男女は手に手を取り合つてデイトを楽しむ。男性から電話があれば、差しつかえない限り、女性はデイトを承諾するのが普通。しかし、デイトの後には、男性は、所定の時間までに、女性を家まで無事送る責任がある。ティンエイジャー（十代のパーティでは、あらかじめ参加者名簿（Roster）を作製しそれ以外の人は、当日入れないことになっており何人かの保護者の監督を必要としている。例外はあるが、これが原則である。決して日本で考えているような、勝手仕放題の乱痴気さわざではない。

家庭生活を眺めて見ると、十八才までは、子供は親の下におかれ、いうことをきかなければならない。小学校へ通う子

供達は、週日は九時か十時前には床に入る。たとえテレビが見たくとも。しかし、金曜日の夜は多少遅くまで許される。

なぜなら、学校は、土、日曜が休みであるから。八年振りに日本に帰つて、子供達が親に文句をいうのが余りにも多いのを見たり、テレビを夜おそくまで見ているのを見聞するにつけ、この子供達は、精神的にも、肉体的にも、不健全な自由のはきちがえをして、いるのではないかと思えてしょうがない。日本では、一般に、小さな時に甘やかして、大きくなつてからうるさくいう傾向があるが、これはまるきり逆である。小さい時によい躾（シツケ）をし、成人以後に備えるべきではないのだろうか、そして、成人式を迎える二十才以後になれば、今度は、言動に自分で責任を持つて行かなければならぬ。親にしても、子供が一人前になってまでも、責任を持たされては、やりきれないことと思う。日本の風習として、たとえ子供が成人していても、もし子供実際には大人だが不都合なことをした場合、必ず親が批難される。これでは親も浮ばれない。成人したならば、その人一人が責任を持つて行くべきではないだろうか、これが、本当の意味の個人主義というものである。個人主義とは勝手気儘に振るまうことではない。自分のことは自分で責任をもち、他の権利も認めに行くことである。

個人主義に関連するが、よく結婚式の場合日本流では、まだ、何々家と何々家の結婚式（又は披露宴）という札が見られるが、これは、家中心の思想習慣の表われであり、この場合も「何々君と何々嬢」とすべきではないだろうか。

次に愛国心について、感じたことを述べて見たい。まず、米国では、公式の建物、たとえば、官庁、学校、銀行、郵便局等には必ず星条旗が週日および祝日には掲げられている。公立学校（例えば羅府市立大学）には、各教室にも星条旗がおかれている。いうまでもなく、国旗はその国の尊厳を象徴している。その旗を通じて、自国の偉大さ、尊さを知り、忠誠の心、愛国心を養うのである。日本でも愛国心について論議されている。しかし「日本の国旗はどうなってるの」と問い返したくなるのが現状。もっとも、デパートや出光石油の営業所には日章旗が見られるが。

昨年十二月三十一日、例の、紅白歌合戦を久し振りに見た（聞いた。）これで強く感じたことは、社会一般の傾向かも知れぬが、男性の女性化、女性の男性化ということである。これはもちろんオーバーな表現であるが、これも男女平等とかいう思想の表われだろうか。街に出て見ると、長い髪をした若者が、顔は美しく、美女といったらおこられるだろうかそんな感じで歩いている。かと思うと、断髪頭をして、長靴

をはいた可愛い子ちゃんが往来を闊歩している。さて、歌合戦を聞いても、男性歌手は、みな美男子で優しく、それだけに迫力に欠けた感じ、これに反して、女性軍は、羽織袴をつけていた人があったかどうかは忘れたが、概して出立は立派腹の底から歌っていて、迫力を感じた。米国では男が女を大事にする。当りまえのことである。これは、「弱きもの汝の名は女なり」という思想に基づいているものか、開拓時代の女性不足が、男性をして女性を大事にするような習慣となったものか、あるいは、元来、男は女を愛するように出来ているものなのか、その原因は、今詮索する必要もない。しかし見のがしてはならないことは、女性も男性を大事にするということがある。なるほど、二人が外に出て街道を歩く場合、男性は女性を内側に歩いて歩くとか、タクシーに乗る場合、女性を先に乗せてやるとか、重い荷物を持ってやるとか等は、一般常識となっている。このような所を見る日本女性は、何事もこのような具合であると思ひ込みやすいようである。しかし、一旦、家庭内に入れば、お奥さんがテキパキと仕事をする。上流社会に行けば行く程、主婦の責任は大きいといわれている。

男女のことに関連して、米国では、養子、すなわち、男性が女性の家庭に入り女性の姓を名のするという制度はないと聞

いている。一般に女性が強いいわれている国における一つの面白い現象である。

米国の人口は最近ようやく二億となった。日本の人口の僅か二倍である。土地の広さは何十倍とあり、資源も豊富であるので実力があるものが延びるだけの素地はある。この米国における日系人は約五十万乃至百六十万と推定される。少数民族ではあるが、日系、二三世の学生には優秀な人々が多い。クラスの長になったり、最高成績で卒業したり、各種の賞を受ける人々がかなりある。クラスの上位に入るのは、ユダヤ人と日系人ということをよく耳にした。われわれ日本人は、世界でも優秀な民族の一つであることに大いに誇りと自信をもってよいと思う。これは何も、国粋主義、民族主義を提唱しようとするものではない。これは世界という大きな舞台の上で、日本人として貢献できる役割の可能性を意味しているものである。このことは、日本文化、思想についてもいえることである。

我々が賑かな所、例えば、ハリウッド、デイズニールランド、ビックベア・レイク（羅府市地方にある大きな湖のある町）等に行つて、何か土産品を買う場合、これは値打ち（即ち、値段もそんなに高くなく、仲々手のこんだ品物）だなど思われる品物をよく調べて見ると「日本製」(Made in Japan)

と書いてあることがよくある。たとえば日本製と書いてあつても日本では販売しているものではないはずだが、日本への土産には一寸どうかと思つてしまふ。日本の技術の優秀を誇るが、一方がっかりもする。

ある時、友人とハリウッドのある店に入つた折、日本語でそのことを話しながら土産品を探していると、そこに働く女の子が、「それは日本ではありませんよ」と教えてくれた。これを見ても土産品と日本製の関係の強さが判る。ことわつておくがこの女性には日本語は知らなかった。

ここで一寸デパートを覗いて見よう。メイカンパニー、ブロードウェイ、シアスロバーク、ブルックス等有力なものがあるが、中に入つて印象的なのは、そこに働く店員の中には、年取つた婦人が多いということである。日本では、六十の声を聞くと自分から老人になつてしまふ傾向がある。しかし、アメリカの人々は、働ける間働いて、それによつて、自分の生活を楽しくまた明かるくして行く。いくら年を取つても（否、年を取るから）化粧をし、口紅もつけて、しっかりとした身支度を整えて颯爽と職場に出かけるわけである。こうした人々が働くのには、デパートはもっともよい所の一つである。しかし、年は争えないことは事実である。一方、日本のデパートに入ると、明るくて、若々しく感ずる。ピチピ

チした女性を見るだけでもちがう（失礼）。それに装飾もよい、やはり、日本のデパートは一流だと思ふ。女性で思ひだしたが、今は大部少なくなつたが、一時よく頭髪を赤く染めてゐる人を見かけた。日本の一流美容師某婦人が渡米された時も、そうであつた。しかし、日本女性の黒髪は、また不思議な魅力のあるものである。無理して毛唐かぶれすると魅力を損う。もつともこれも、金髪碧眼の白人女性を見すぎた結

▼古刹訪問▲

神奈川・大山「西岸寺」

寝釈迦（ねじやか）とは、お釈迦さまがお亡くなりになられたときのお姿、すなわち涅槃像のこと、私の住むあたりでは俗にこういふのです、おそらく方言でしょう。

本来なら、涅槃―入寂―入滅のありさまは、絵画にされ掛軸になる。これはたいていの寺院でお見受けする、これを涅槃絵と申します、毎年二月十五日のお釈迦さまのこの日に奉掲して、遺徳を追慕する法会が営まれる、これを涅槃と言います。

果かもしれないが。米国における生活を通じて学んだことを語れば、まだ限りがない。以上は、私自身の、限られた生活から得たものである。必ずしも全体には通じないものもあるかも知れない。しかし、自分の国を離れ、他国のことを学び、外側からもう一度自分の国を見ることにより、われわれは、その長所や欠点を教えられることができる。



中村昌治

この絵をつぶさに拝見しますと、娑羅双樹の下で、お釈迦さまは、静かに瞑目され、頭を北、お顔を西、右脇に臥し、周囲にはお弟子をはじめ天童鬼畜が慟哭するありさまが表現されています。

さてこの涅槃像を寺院の本尊におまつりするところは、あまり見られません。

次にその一例を挙げ、つづいてそのお姿におまいりする俗習について記しましょう。

神奈川県中部伊勢原町大山（昔は相模国大住郡糟屋庄坂本村）の大炭山西岸寺（浄土宗）縁起によると、古は霞川山大炭院、江戸芝増上寺の直末、開山は大炭上人（天文五年（一五四六）八月三日卒）俗称ちやとうでら（茶湯寺）といっています、土地では俗称でないと通用しません。

本尊さまは、いわゆる「寝釈迦」です。お像の由来については、水戸から相模に流れ着いた桶で彫刻したものと伝承される。身の丈、一丈八尺（約五・五米）おそろしく大きなみごとなお像です。

記すまでもない、この寺は、関東の霊山、大山（雨降山・阿夫利山）の中腹（標高三五九米）にある。小田急線の伊勢原駅で下車、駅前の大山ケーブル行のバスに乗ってその終点で降り、登山道の両側にならぶ土産物店の間を通り抜けて五分ばかり行くと左手に「ちやとうでら」と刻んだ石の角塔がある、ここから左に折れて溪流大山川の橋を渡る、右手の巖の突端に二米余の自然石に名号が深彫される、署名は唯然として花押がある、裏には元治元乙丑年（一八六五）仏生日建之至覚代と読める。これがこの奥に寺院ありということを示す唯一の標識である。さらに進むと右手は巖壁、左手は大山川の支谷、このあたり羊歯・蕨

苔類の異種が多い、「植物の採集をやめましょう」の立札がある。それからとつつきが庫裡、次に本堂があるがまことにつつましい感じのお寺である、定着の壇下はないらしい。刺を通じて住職吉永哲文老僧にお会いできたのは嬉しかった。それから本堂に廻ったら堂前に五百羅漢の石像がならんでいた、そして開扉して寝釈迦さまを拝した。

このおまいりが「寝釈迦まいり」である。これは肉親に死別してのち百ヶ日の翌日、この寺の寝釈迦さまに参詣することは、別に百まいりともいう、このおまいりは宗門宗旨にかかわらず必ず行われる。そしてここで茶湯供養をしお札をいただいて帰途につく、この帰路、別れた肉親によく似た人に邂逅すると信じられている、以前はこの人に応分の喜捨をするときさらに功德になるといわれていた、そしていただいたお札は自家の仏壇に納める、これで寝釈迦まいりは恙がなく済むのである。

相模地域一帯ではこの慣習が今でも連綿として続いている。肉親に離別した、たえがたい淋しさがこのおまいりによって幾分なりとも慰藉せられるのである。

———
(以上のような地方に伝わるお話をお寄せください。)

和訳三部経

無量寿経(3)

念仏往生の願



村瀬秀雄

一 法蔵比丘の修行

世自在王仏はこのように法蔵比丘を勵ましてから、二百十億にのぼる多数の仏国土を眼の前に現わして見せた。そしてそれらの仏国土の一つ一つについて、そこにいる人々の善し悪し、莊嚴の優劣その他の点について法蔵比丘の求めに応じて説明した。

法蔵比丘は仏が説く淨国土の有様を聞きながら、これらを目の高りに見て比較し検討した上で無上殊勝の願をおこすことになった。その時の法蔵比丘の心は寂靜であり、何一つ執着するものがなく、まことに尊い心境であった。淨土としてあるべき莊嚴について、更にまた清淨な修行について、法蔵比丘は五劫という長い間にわたって熟慮を重ね、想を練り、多くの仏国土について勝をとり劣を捨てるといふ選択をすすめていった。

ここにおいて阿難尊者は釈尊に質ねた。

「世自在王仏の寿命はどの位の長さなのか」

釈尊は答えた。

「この仏の寿命は四十二劫である」

釈尊は更に説法を続けた。

「とにかく法蔵比丘はこのようにして二百十億にのぼる諸仏の国土の中から、淨土の莊嚴と清淨の行を選択し終つたのである。そこで法蔵比丘は世自在王仏の所に行き、御足を頂き、三たび仏を廻つて礼拝してから、合掌して申し上げた。

『世尊よ、私はすでに淨土を莊嚴する清淨の行を選択し終つた』

これを聞いた世自在王仏はいった。

『汝、いまこそそれを説くべき時である。それによつて一切の人々をして淨土に往生したいと發起せしめ、心に喜びを与えなくてはならない。人々はその法を聞いて修行し、無量の大願を成就するようになるであらう』

法蔵比丘はこれに答えて仏に申し上げた。

『仏よ、お聞き願いたい。私はいまから自分の願いをつぶさに説くであらう』

二 無量の壽命と光明

もし私が仏となつたならば、限らない無量の壽命を使つて、百千億那由他劫以上^①に及ぶようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。^②

もし私が仏になったならば、限りない無量の光明をもって、百千億那由他の諸仏の国土を照らすようにしたい。もしこれができなかつたならば仏にならない。^③

もし私が仏になったならば、十方世界の無量の諸仏から私の名や国土が称讃されるようにしたい。もしこれがまきなかつたならば仏にならない。^④

註

1 数の単位。千億のこと。

2 これを十三年無量の願という。もし阿彌陀仏の寿命が有限であつたとすれば、その他すべての機能、性格も有限となるわけで、寿命無量が基礎的な仏の性格といえる。このことについて法然上人は能持の功德ということで説明された。即ち

「凡そ仏の功德を論ずるに、すなわち能持、所持の義あり。いわく寿命を以て即ち能持とし、余のもろもろの功德をみて所持とす。一切の万徳はみなことごとく寿命に持せらるるが故なり。何んとなれば、もし寿命なくんば、相好、光明、説法、利生及びもろもろの莊嚴一切の功德何んによつて

か住せん。これによりこれをみるに、独りただ寿命無量の一願、自余の諸願を撰す。

大悲の善巧、またこの願にあらわれるなり。それそも彌陀如来の寿命無量の願をおこし給ひしは、おのが身を愛惜して長寿の果報を求め給うにはあらず。ただこれ済度利生の方便にして、また衆生をして欲求の心をおこさしめんがためなり。一切の衆生皆寿命の長遠を願うが故なればなり（阿彌陀）を翻じて無量寿というまことに所以あり」（逆修説法）

3 これを第十二、光明無量の願という。十方世界のすべての念仏行者を救うためには、光明が無量でなくてはならない。法然上人は阿彌陀仏の光明を賞讃して

「もろもろの功德の中には光明をもって勝れたりとす。また諸仏の中に、阿彌陀如来の光明最も勝れたり。その故に教主釈尊讃じて曰く、無量寿仏の威神光明は最尊第一にして諸仏の光明及び能わざるところなり」

（逆修説法）

といわれている。

4 これを第十七、諸仏称揚の願という。浄土はすべての仏国土から選択され、精髓を集めたものであるから一切の諸仏も必ずや称揚したまうであらうという強い期待と確信をあらわしている。

三 浄土のすがた

もし私が仏となったならば、浄土に往生した人々が用いる一切のものは、すべて清浄であり、光沢があり、精巧であり、しかもその数が無量であるようにしたい。もしこれができなかつたならば仏にならない。^①

もし私が仏になったならば、浄土は清浄な処であつて、よく磨かれた鏡に自分を映すように、十方世界の諸仏世界を照見できるようにしたい。もしこれができなかつたならば仏にならない。^②

もし私が仏になったならば、浄土は大地から虚空に至るまで宮殿、楼閣、池の流れ、樹木その他一切のものが、無量の宝物ででき、百十種類の香をもつて合成され、妙なる飾りがつけられて他に類例がないものになりたい。

香りは十方世界に薫じ、このことを知った人々はみな仏道修行に励むようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。^③

註

- 1 これを第二十七、所須嚴淨の願という。
- 2 これを第三十一、国土清淨の願という。
- 3 これを第三十二、国土嚴飾の願という。

四 念仏往生の願

もし私が仏になったならば、十方世界の一切の人々が真実の心をもって至心疑いなく信じて歡喜し、信樂、淨土に往生したいと念願し欲生我國乃至十念するならば、必ず往生を上げさせるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。^②但し五逆と正法を誹謗するものを除く。^④

もし私が仏になったならば、十方世界の人々が菩提心をおこし、諸功德を修し、真実の心をもって淨土に往生したいと願うならば、その人の命終の時に臨んで、聖衆に囲まれ、

その人の前に身を現わすようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。^⑦

もし私が仏になったならば、十方世界の人々がわが名号を聞いて淨土を慕い、功德のものとある念仏を唱え、他の修行も行い真実から功德を廻向して淨土に往生したいと願うならば必ず往生させるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。

註

1 「乃至十念」とは上は生涯を通じての念仏から下は十念にいたるまでということ即ち念仏を常に相續することである。法然上人はこの句に對して

「經に乃至といえるは、多より少に向う言なり。多とは上、一形（生涯）を尽す。少とは下、十声一声等に至るなり」（選撰本願念仏集）と説明されている。

2 これを第十八、念仏往生の願という。淨土がいかに勝れた所であっても、また人々がいかに渴仰するところであつても、人々が容易に淨土に往けないとしたならば、單に存在するだけであつて、人々の

利益にならない。本願は四十八願あつて、淨土にいる人の身体は金色であり、好醜の区別がないといふけれども、それらも淨土に往き得てこそ問題となり得るものである。このことを法然上人は

「四十八願の中に、この願ことに勝れたり」とす。そのゆへは、かの国にもしむまるる衆生なくば、悉皆金色、無有好醜の願も、なによつて成就せん。往生する衆生のあるにつきてこそ、身のいろも金色に、好醜あることなく、五通（天眼通、天耳通、宿命通、他心通、神足通）をも具し、宿命をもささるべけれ」（三部經釋）

といわれ、その故にこの願を王本願と名づけられた。即ち

「凡そ四十八願、みな本願なりと雖も、殊に念仏をもつて、往生の規とす。故に善導の釈にいわく。弘誓多門にして四十八なれども、ひとえに念仏を標して最も親しとす。人よく仏を念ずれば、仏また念じたまふ。専心に仏を思えば、仏人を知りたまふと。故に知んぬ。四十八願の中に、すでに念仏往生の願をもつて、本願の中の王とな

すなり」(選撰本願念仏集)

といわれた。仏道修行には多くの方法があるのに、その中でなぜ仏が念仏だけを選んで往生の行とされたのか。その理由について、法然上人は勝劣の義、難易の義の二つの理由をあげられた。即ち

「一には勝劣の義。念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。ゆえいかなとなれば名号は万徳の帰する所なり。然れば則ち弥陀一仏のあらゆる内証の功德、一切の外用の功德、みなことごとく阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。故に名号の功德、最も勝れたりとす。余行は然らず。故に劣を捨てて勝を取りてもって本願とし給うか。

二には難易の義なり。念仏は修し易く、諸行は修し難し、往生要集に問うて曰く。一切の善業各々利益ありて、各々往生を得。何にが故ぞ、ただ念仏一門をすすむるや。答えて曰く。いま念仏をすすむことは、これ余の種々の妙行を述するにあらず。ただこれ男女貴賤、行住坐臥をえらばず。時処諸縁を論ぜず。これを修するに難からず。ないし臨終に往生を願求するに、その

便宜を得ること念仏にしかずと、故に知んぬ。念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば即ち一切衆生をして、平等に往生せしめんがために難を捨てて易をとりて、本願としたまうか。もしそれ造像起塔をもつて本願としたまわば、貧窮困乏のたぐいは、定めて往生の望みを絶たん。然るに富貴の者は少なく貧賤の者は甚だ多し。もし智慧高識をもつて本願としたまわば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。然るに智慧あるものは少なく、愚痴の者は甚だ多し。もし持戒持律をもつて本願としたまわば、破戒無戒の人は、定めて往生の望みを絶たん。然るに持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行、これに准じて知るべし」

(選撰本願念仏集)

といわれた。また第十八願は觀經の三心に通ずると説かれてゐる。即ち

「この文に至心といふは觀經にあかすところの三心の中の至誠心にあたり。信樂といふは深心にあたり。欲生我國は廻向発願心にあたり」(要義問答合)

3 五逆は殺父、殺母、殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧の五大罪のこと。

4 この本願に但書を付して「ただ五逆と正法を誹謗するを除く」としてあるのは、人々に対してかかる重罪を犯すことのないように抑止するために付したものである。

それならもしも五逆と正法を誹謗するという大罪を犯してしまった者があつたとすればその者は觀無量壽經に説く通り、念仏を唱えることによつて往生できるのである。

ここに正法というのは仏法のことである。

5 菩提心を求める心のことで、上は仏の悟りを求め、下は人々を教化することをいう。

6 諸功德はいろいろの功德のことであるがここでは念仏を唱えるのに、念仏以外の諸行を混えて修行するという意味である。

7 これを第十九、来迎引接の願という。

人は臨終に際していろいろの空が迫り来るが、苦しみをために惡道におちないように阿弥陀仏自ら来迎され、淨土に往生するものを迎えたもうという願である。

お歌をいただく

あみだ仏といふより外は津の国の

なにわのこともあしかりぬべし

(勅修御伝第三十)

もともと「津」は船の渡し場のことですが津の国は摂津の国のことであります。「なにわ」は大阪という地名に「何は」をかけた言葉であります。「あしかり」は蘆を刈るということに「悪しかり」をかけた言葉で「ぬ」は意味を強めるのに用い、「べし」は推量であります。そこでお歌の意味は

南無阿弥陀仏と称える以外の修行は、どのような修行であっても悪いことでありましよう。

ということになります。このお歌は法然上人が大阪で詠まれいといわれ、お念仏以外の仏道修行は、摂津の国の大阪の蘆を刈るようなもので極楽往生のためには何んの役もたたないばかりか、かえって悪いことになりかね

ないであろうと詠われたもので、まことに強きくいだった御信念と申せると思います。

念仏生活のあり方として第一に敬いおがむ生活（恭敬修）、第二にひとすじに念仏を申す生活（無余修）、第三にすぎまのない生活（無間修）第四にあまくでも長くすすみゆく生活（長時修）とありますが、このお歌は第二の無余修を詠われたものであります。上人はこの四つの生活のあり方の内で、無余修を最も重くみられ、最後の第四番目において説かれています。即ち

「四に無余修というは、要決にいはいはく、もはら極楽をもとめて弥陀を礼念するなり。ただし諸余の行業を雜起せざれ。所作の業は日別に念仏すべし。善導ののたまはく、もはらかの仏の名号を念じ、もはらかの仏およびかの土の一切の聖衆等をほめて余業をまじへざれ專修のものは、百はすなわち百ながらたまれ雜修のものは、百が中にわづかに一二也。雜縁にちかづきぬれば、みづからもさへ、他の往生の正行をさふる也。我みづから諸方をみきくに、道俗の解行不同にして專雜こと也。ただ心をもはらになすは、十は即ち十ながら

むまる。雜修のものは千が中に一つもえずといふ」

と説かれています。

このお詞の中で、余修を行えば正行を妨げるものとなるといわれ、雜修のものは千人、万人の者の中で一人も往生できるものがないと仰せられています。余行を少しも混えない無余修であつてこそ、十人は十人ながら全部が浄土に往生できるのであります。

お念仏は称えることは功德の多い修行として昔から行われていました。しかしそれは多くの修行の一つとして行われていたのですが法然上人は他の一切の修行をすて、お念仏だけを修行する法門をうち建てられました。また上人が念仏だけを選びつたことを選択といひます。しかしこの選択は何にも上人の発明ではありません。阿弥陀さまが法蔵菩薩としてご修行になつてゐる時に四十八願をたてられました、この本願の一つ一つが実は選択という手続をとつて建てられたものであります。このようにして上人は、南無阿弥陀仏と称える以外のことはすべて「あしかりぬべし」と淡々として詠われました。



ピーターとおおかみ



プロフィエフ作品

音楽劇「ピーターとおおかみ」より

脚色 大正大学児童研究部

アヒル ガアガア、わたしやにげるよ。あれ
ま、たすけて、門がしまっている。どうしま
しょう。

仕方ないので奥の方にかくれようとするが
おおかみにみつかってしまった。

おおかみ おや、ちょうど良いおかしそう
なアヒルがいる。あれにするぞ。

おおかみは大またで、アヒルを、追つてい
く。小鳥たちやネコもアヒルに応援する。

ネコ、アヒルからおおかみの気をそらせる
ためにかまう。

小鳥達 アヒルさん、早くにげて。

ネコ おんや、カツコイイおおかみさん。こ
の木の上に、とてもおかしそうなものがある
の、とつてくれない。

おおかみ 良いものだった？何もないじやな
いか。オレさまはあのアヒルで充分だ。

おおかみ、一度木の下へくるが、うそだと
わかって、すぐにアヒルを追いかける。

アヒル タ・ス・ケ・テーツ。あたし食べら
れちゃうよ。

アヒル。けんめいに逃げるが、おおかみの
早いのにおいつかれてしまいそう。

おおかみ ヨチヨチ歩きのアヒルめ、逃げた
って無法だぞ、オレ様にかかったらおとなし
くするもんだ。

ネコと小鳥はおおかみの気をそらそうと、
声をふりしぼってさけぶが、全く相手にさ
れない。

ネコ ネエ、おおかみのダンナ、こっちの方
がよろしいようよ。

小鳥達 アヒルさん、にげてにげて。

アヒル、とうとう追いつかれてしまう。
アヒル タスケテータスケテ！。

おおかみはすばやくアヒルに袋をかぶせる
おおかみ エヘヘ……まったくうまさうなア
ヒルだ。

それをついで、森の方（方手奥）へ行く
急にアヒルの声が切れてしまい、ネコも小
鳥も一瞬、われを失った状態。

しばらくして、

ネコ あら、消えてなくなつたようね。

小鳥一 大変だわ、どうしたのかしら。

小鳥二 どうしましょう。
おおかみは袋を引っぱって出てくるが、重
くてこまってしまう。

おおかみ さあて、これでおなかがいっぱいになるぞ、だけど、このアヒルなんて重いんだらう。そうだ。

しかし何を思ったか、袋を置いて森の中に入ってしまった。これを見て、小鳥とネコは今のうちにも思つてそばに寄ろうとするが

小鳥一 あら、おおかみが森へ。

小鳥二 今のうちにアヒルさんを見よう。

ネコ 早いとこ助けましょうよ、小鳥さん。

小鳥一 でも、おおかみが……

今にもおおかみが帰つて来そうで、なかなかおりられないといった風。

ネコ アヒルさん、すぐ逃げた方がよいよ。

小鳥、素早く木からおりるが、こわくて仕方がない。

小鳥一 袋をあげないとだめなのよ。ネコさん、早く行つてきなさいよ。

ネコ 私だつて、何とかしたいんだけど、どうもネ。

小鳥二 アヒルさん、アヒルさんデバ。

そのうち、おおかみが手押し車をゴロゴロと森から出てくる。袋を車に乗せて、木の上の小鳥とネコを見て言いながら森へ入っ

ていく。「下手」

おおかみ これならいいだらう。お前達もあとで、オレ様のごちそうになるんだぞ。

小鳥とネコ、しばらくおおかみの入っている森の方を見ていたが、もうおおかみが見えなくなったので、ネコがおりて来、小鳥もそれに続いておりて来て、アヒルに同情する。その時ビーターが門の所に現われる

ネコ アヒルさんがつかまつた。これは大変なことよ。

小鳥一 かわいそうなアヒルさん。

ネコ ビーター、アヒルさんがつかまつちやった。一大事のように。

ビーター 悪いおおかみめ、よし、ボクがつかまえに行くんだ。

(幕)

(幕前) 所、森へ続く道、おおかみが再び出るかも知れないし、早くしないとアヒルが食べられてしまうので、小鳥、ビーター・ネコは急いで出てくる。

小鳥一 早くアヒルさんを助けないと食べられてしまうわ。

小鳥二 ビーター急いで。

ビーターは縄を肩にかけ、手にはおもちゃの鉄砲・ラツバ・タイコを持っている。

ビーター ボクにいい考えがあるんだ。

この時、小鳥とネコはやつぱりビーターをはさんで離れている。

小鳥達 あたし達お手伝いするわ。

ネコ あたしも、もちろんね。

小鳥二 ネコが一緒じゃないやだわ。

ビーター けんかしちゃだめだよ。これはみんなやるんだから、ネコ君。

ネコ、ビーターにいわれて仲直りの誓いを立てる。

ネコ ありや、いけなかったようね小鳥さん。仲直りつてとこなんだけど、今度は本物よ。早いとこアヒルさんを助けたいんだけどどうでしょう。

小鳥達 ほんとうに？

ネコ ほんと、信じてくれないなんて……かなしいわ。

小鳥一 いいわ。

ビーターは小鳥とネコにそれぞれ耳うちして、小鳥にラツバとタイコをわたして出発する。

ビーター それじゃ、いいかい。わかったかい。

小鳥達 ええ、いいわよ。

ネコ オーケー、やってみましょう。

ビーター さあ、森へ急ごう。

小鳥達 出発！

ビーター・小鳥・ネコは急いで下手へ消える。

第二幕

出発の歌

森の中。周りは木立がたくさんあり、手前にちよつと空地がある。空地の中央に切り株があり、おおかみが座っている。そばには手押し車が置いてある。木立のうしろからビーター・ネコ・小鳥達がチヨコチヨコと首を出すがおおかみにはわからない。おおかみ、ニコニコしながら袋に手をかけている。

おおかみ さて、食べるとしようか。あんまり重かったのでひとあせかいてしまった。袋をあけようとすると、木のうしろからラツバの音がする。おおかみ、キヨロキヨロするが誰もいない。

おおかみ おや、変な音だ。そう耳かな。まあいい。

すると今度はタイコの音がするが、やっぱり誰もいないので、思い出したように袋に手をつける。

おおかみ あれ、今度はタマコだな。うるさい！ オレ様はお腹がすいているんだぞ。誰もいないな。アヒルだ、アヒルだ。

今度はラツバとタイコがやかましく鳴るのでいらいらしてどなる。

おおかみ えーい、うるさい音だな。やめろ！ オレ様はおこったぞ。出てこい！

するとラツバとタイコを持って小鳥達登場。ビヨコビヨコと飛びまわりながら。

小鳥達 ブブブ……。ドンドンドン……。

おおかみの両側からわざとブカブカドンドン。おおかみ、いらいらしながら袋を置いて耳をおさえる。

おおかみ うう……。うるさい！ 朝の小鳥達だな。じゃまするな。向うへ行け。やめろ！ 次に立ちあがって空腹をおさえて二人を追いまわす。

小鳥一 こつちよ、おおかみさん。ブブ……。

おおかみ ラツバやめろ！

小鳥二 こつちだよ、おおかみさん。ドンドン……。

おおかみ タイコやめろ！

小鳥一 ブブブ……。

小鳥二 ドンドンンドン……。

くるくる飛びまわる小鳥達にふりまわされおおかみ、空腹と疲れからふらふらになり木の切り株に座ってしまふ。

おおかみ やめろっていうのに。

この時ネコがこつそりと後から行き、アヒルの入った袋を引っぱろうとするがおおかみが顔を向けたのや、あわててオモチャの鉄砲を打つが音だけでダメ。急いで木の後にかくれる。おおかみ、再び立ち上って小鳥達を追いかける。がまた切株に座ってしまう。

おおかみ アレ、ネコのやつも来ているぞ。

オレ様をからかいに来たんだな。えーい耳が変になってしまふ。やめろ、やめろってば。この様子を見ていたビーターがネコに縄をもたせる。

ビーター さあ、今のうちだ。ネコくん、た

のんだよ。

ネコ ちょっとふるえているようよ。こつそりこつそり。あらあら私ってだめね。

ネコ、そつと縄をもって、おおかみの後からかけようとする。が足がもつれて途中でころんでしまう。あわててひっこむ。ビーターおどろいて縄をひっこめる。この間、小鳥達はブカブカドンドンとやって、お

かみの気をそらす。おおかみはフラフラ。

おおかみ もう、いいかげんにしろ！ オレ様はもうヘトヘトだぞ。

ビーター おちついて、おちついて、いいかい。

ネコ ちょっとはずかしかったようね。今度こそまかせといえ。そらまたまたさえないようネ。

ネコ 再びそろりそろりと縄をて持ついくやつぱりこわいので途中から縄を投げてみるが横の方へそれてしまう。この時小鳥達音を出すのをやめて見つめるが、がっかりする。

小鳥一 もう少しだったのに。

小鳥二 ネコさん、だいじようぶかな。

小鳥達、再びおおかみの気をそらすようにブカブカドンドンやる。この時ビーターがこつそりと出てアヒルの入った袋を木の後に引っぱっていくが、おおかみは気づかない。おおかみはまたのろろと動き出そうとするが途中でダウソ、座りこむ。その時ビーターが縄をもって来ておおかみのしっぽにかけてしまう。

ビーター そら！ どうだ、早く縄を引っぱって！

ネコ・小鳥達いそいで縄を木にまわし、ひっぱる。

一同 よいしょ、よいしょ。

おおかみ あいたた……、だれだ……い、し

っぱを引っぱるのは……、

おおかみもただけはもがくほど、ビーター達は縄を引っぱり木の所までつれてくる。

ビーター もっときつく、もっときつく。

一同 よいしょ、よいしょ。

おおかみ うわ……イタタタ……タスケテクレ

……やめないとかみついてやるぞ。はなせはなせ、はなしてくれ。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和十三年 四月二十五日 印刷

昭和十三年 五月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

(つづく)

新刊 故林彦明大僧正著

「五重大会勤誠講録」 送料共400円

領売所 四日市市六呂見観音寺中

記主 禅師 鑽 仰 会

振替 名古屋 4 0 1 2 番

＜善光寺参拝と信濃の旅のお宿＞

薬 師 会 館 五月一日よりオープン

檀信徒をおつれになつて御来遊下さい

宿泊料（1泊食）A, 2500 B, 2,000 C1,500円

団参の方々には特別御相談に応じます

長野市松代町東条

温泉旅荘 薬 師 会 館

小 布 施 弘 学

新刊 藤 井 実 応 著

「生 き る 歩 み」

頒価200円送料45円

ハガキ通信15年分をまとめたもの

申込先 愛知県宝飯郡小坂井町伊奈新屋

藤 井 実 応

振替 名古屋 2 7 4 6 2 番

最近刊 浄土宗徒待望の好著

佐藤密雄 著

仏教々団の成立と展開

著者のもつとも得意とする仏教々団の規律と統制の問題を分りやすく概説し、現在の仏教々団の在り方に多大の示唆を与える。

林 靈法 著

仏との出会い

現在仏教界における革新的思想の第一人者たる著者が若き日の苦難と思想遍歴を通じて到達し得た浄土教信仰を余すなく描き尽す。

竹中 信常 著

日本人と仏教

法然上人と念仏信仰とをひろい視野のもとに、現代日本人の思想構造のうえに位置つけた好著

以上いずれも

教育新潮社刊

定価 六〇〇円
送料 七〇円

◎ 当方にてお取次ぎいたします

◇ 浄土トラクト ◇

- | | | |
|-----------|-------------|----------|
| 四季の寺まいり | (再版) 安居香山 著 | 価30・〒15 |
| 浄土宗のおしえ | (四版) 宮林昭彦 著 | 価30・〒15 |
| 諸仏の戒め | 村瀬秀雄 著 | 価5・〒15 |
| 一枚起請文をめぐる | 村瀬秀雄 著 | 価120・〒35 |
| 選択集私解 | 竹中信常 著 | 価120・〒35 |
| ものいう石 | 竹中信常 著 | 価150・〒45 |

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187